

とうやいつや 桃夜五夜

辻 茉莉絵

一夜

あれは、ある春の夜のことだった。古くからの友人と呑んできた帰りで気分よく酔っていた私は、普段は通らない路を月に照らされふらと歩いていた。今宵の月は十六夜といったところだろうか。満ちてはいないものの明るい光を落としている。

そんな私の目の前にひらりと一枚の花弁が風に運ばれてきた。手の平で受け止め、よく観察してみると、それは桃の花であるらしい。

足元を見れば同じような花弁が無数に散らばっている。しばらく前から私の隣に続いていたこの高い塀の向こうから来ているようだ。

高いとは言っても、普通ぐらいの背の人間が手を伸ばして飛び上がったとしても届かないといった程度で、他人よりかなり上背のある私が跳んだのならばどうにか端に手がかかる、ぐらいのものであった。

少しこの花弁の主を見てやろう、そんなふうにして私は塀の傍で飛び上がり、予想通りその手は塀の端を掴むことが出来た。

腕に力を入れ、塀の側面を強く蹴る。その上に到達したその瞬間、私は一瞬息をするのを忘れてしまった。

塀の向こうに在ったのはただ一本の桃の木ではなく、奥にあるであろうはずの屋敷が見えない程の広さを持った桃園だった。

流石にどの木であるかはわからなかったものの、桃の木があることを確認したのだからそこで帰ればよかったのだが酔いのせいで気が大きくなっていった私は、半ば夢見心地で桃園へと降り立ってしまったのだった。

歩みを進めると私の総身は甘い香りに包まれ、ますます夢の中のような気持ちになつていく。もしや私はどこかで洞を抜けて桃源郷へと迷いこんだのではないかとも思った。

そんな時、私が居る場所よりも更に奥、ふわり、ふわりと漂うような動きをしている白い影が見えた。

幽鬼の類いが現れたか、といくらか酔いも覚め身構えたものの、どうやらそうではないらしい。

それは白い娘だった。肩の長さで切り揃えられた絹糸のような髪、透き通るような肌、身に纏った衣服、その全てが純白だった。

ただその瞳と服の刺繍だけが赤、いや、濃い桃色に浮かび上がっていた。

顔立ちはとても綺麗に整っており、大人しく座っていたのならまるでよく出来た人形のようにも見えたことだろう。

娘は自分以外の何者かが居るとは微塵も思っていない様子で歩いていたが、私との距離が木、数本分まで迫った頃、ようやくこちらに気がついて、歩みを止め

た。

——お前はこの家の人間か。

私が問うても首を傾げるばかりで答えはない。

——ならば幽鬼の類いか。

そう問うてもやはり答えはない。

何度もそんなことを繰り返し、ようやく合点がいく。どうやらこの娘は言葉を知らないらしい。

なんとはなしにこちらからも歩を進め娘の前に立つと、ただ桃園の中を歩いていた時よりも濃い桃の香りがした。

幽鬼というよりも桃の精と言った方が近そうだ、そんなふうと考えていると不意に娘の手がこちらへと伸ばされた。

敵意や害意は感じなかったためそのままじっとしていると、やがて娘の手は私の肌蹴た服の胸元へと触れた。

夜気に晒されていたせいとその手は冷えていて、酒で火照った肌には心地よかつた。

胸元に当てられた手に自分の手をそっと重ねると、娘は少し不思議そうな顔をしたがすぐに表情をほころばせ、まるで辺りに咲く桃の花の一つのような笑顔を見せた。

しばらくそうしていればやがてその手は体温を帯びてくる。それは間違いなく、生きているもののぬくもりだった。

空いている方の手で娘のもう片方の手を取り温めてやっていると、娘が来た方角から鐘の音が響いてきた。

それを聞いた娘はその方向を向き、そっと私の手を振り払った。そうしてまた笑顔を見せると、軽やかに桃園の奥へと走り去っていった。

しばらく私はそこで立ち尽くしていたが、そのうちにここが誰かの家であることを思い出し、慌てて入ってきた時と同じように塀を乗り越えてその場から走り去った。

どこをどう通ってきたかは忘れたが、私はいつの間にか家へと辿り着き、布団に倒れこんでそのまま眠り込んでしまった。

次に目が覚めた時にはもう日は高く昇っており、昼に近いのだということがわかった。二日酔いで痛む頭を押さえながら起き上がる、昨夜の桃園は夢だったのだろうか。

その時、私の頭上からひらりと白いものが舞い落ちる。それは桃の花弁だった。それこそが昨夜の桃源郷と白い娘が夢で無いことの唯一にして無二の証明だった。

た。私はそれを読みかけの本の頁に挟み、友人の元へと出かける準備を始めた。

友人の家に着くと、彼は私の顔を見るなり呵呵、と笑った。

——随分酷い顔だな、かなり呑んでいたし無理もないか。

そう言われ少し腹は立ったものの事実であるため返す言葉もなかった。

——この辺りで桃園のある家を知らないか。

挨拶もそこそこに私はそう切り出した。

今一度あの場所へと赴きたいと思ったが、どうしても思い出すことが出来なかったため、駄目で元々と彼に尋ねてみたのだった。

彼は顎髭を弄りながらしばらく考え込んでいたが、やがて口を開いた。

——どうしてまた、そんなことを？

——いや何、今朝起きてみたら髪に桃の花弁がついていたから、どこのものかと思っただけ。

そう返すと彼はまた少し考えこんで、こう言った。

——少し心当たりがある、ここからそう遠くない場所だが、行ってみるか。

断る理由などあるはずもなく、彼の言葉に応じ、私達はその心当たりの場所へと向かった。

着いてみれば、夜と昼とではやはり雰囲気が違っているものの、間違いなく昨夜のあの扉に囲まれた屋敷であった。

彼の話だとこの時期は昼間だけこの桃園を開放しており、誰でも自由に歩き回って良いということらしい。

夜に入ることが許されないのは、盗人を防ぐためでもあるだろうが、あの娘を隠しておくためでもあるような気がした。

しばらく彼と共に桃園を散歩してみたが、案の定娘の姿を見ることはなかった。

互いに歩き疲れて、どちらともなく桃園を後にした時、彼は不意に私に問うてきた。

——お前、あの桃園で何か……誰かか、探していただろう。

問う、というよりは確信的に、確認するかのような言葉だった。

そこまで判りやすかっただろうか、と内心溜息を吐きながら、私は昨夜のあらましを彼に話した。

話している途中、彼はまた何か考えこんでいるようだった。どうかしたのか、と問えば少し躊躇いながらもこんな答えが返ってくる。

——あの屋敷の主には子が無いはずだ。

——そんなはずはない、それは確かか。

そう聞けば殆ど間を置かずに頷いた。

——もしかしたら本当に桃の精だったのかも知れないな。

呵呵と笑って、彼はこの話を切り上げた。

二夜

その夜、私は再び例の塀の前に立っていた。あの娘が人なのか、そうでないのか、もう一度会って確かめようと思ったのだ。

昨夜と同じように塀を乗り越え、出来るだけ音を立てぬよう降り立った。丈が短く柔らかい草を踏みつけて奥へと進んでいく。

程無くして、白い影を見つけてることが出来た。梢の合間から差し込む月光を受け、相変わらず漂うような動きをしている。

驚かせぬようゆっくり歩み寄っていくと、直に向こうもこちらに気づいたようだった。軽やかな足取りでこちらへと駆け寄ってくる、どうやら私のことを覚えていたらしい。

娘の傍で息を吸い込むと、濃い桃の香りがする。それから昨夜娘がしたように、今度は私から手を伸ばす。

薄桃色の頬に触れば、融けて同化してしまいそうな程の柔らかさと、子供らしい高い体温が伝わってくる。

そのまま指を滑らせ軽くつまむと、くすぐったそうに身を振らせ笑っている。そうしていると、娘は頬に触れていた私の手を取って小走りに駆け出した。

そう速くはない娘の歩みに合わせて着いて行くと、やがて少し拓けた場所に出た。

その隅にある真新しい切り株に私を座らせると、娘は月明かりの下でくるくると回り、踊りだした。

その髪が、服の袖が、裾が、風になびいて、くるり、ふわり、と揺れている。私と目が合う度に、花のような笑顔を零し、ますます勢いをつけて回ったり、

回る方向を変えてみたりする。満ちきつては居ない月の下、大きな桃の花が咲いたようにも見えた。

その様子は、自分はこんなに上手く回れるのだと母に誇る子供の姿そのもので、私はほんの少しでも、娘が人間であることを疑った自分が恥ずかしくなった。

どれほど時が経っただろうか。私はずっとその姿に見惚れていたのだが、流石に疲れたらしく踊るのをやめて私の元へ歩いてくる。

私の前に立つと、何やら物言いたげな表情でこちらをじっと見てくる。私は首を傾げた、がすぐにその表情の理由に思い当たる。

口を開こうとしたものの、言葉を知らないということを出し、言葉は口の中に留まった。少し逡巡し、やがて切り株に座ったまま軽く手を伸ばし、娘の頭を撫でた。

要するに、褒めて欲しかっただけなのだろう。物言いたげな表情は嬉しそうな笑顔に変わった。

撫でる手を止め、下ろした丁度その時、昨夜と同じく、奥の方から鐘の音が響いてくる。

娘はその方向に体を向け、一瞬だけ振り返ってから桃園の奥へと消えていった。私も先程娘と共に駆けた路を戻り、塀を越えて自分の家へ帰って、今日のことを思い返しながらか少しだけ酒を呑んで床に着いた。

目を覚ませば窓からは朝日が差し込んでいる。今日は無事に朝のうちに起きることが出来たようだ。今日は外出する用事も無かったため、先日故郷の母が送ってきた茶葉に湯を注いでそれが煮出されるのを待っていると、表の方から私の名を呼ぶ声がした。

窓から覗いてみれば、案の定声の主は旧友だった。彼と話しだすとつい長くなってしまい、置いておいたものが酷い有様になることがよくあったので、今回はそれを防ぐために予め茶を茶碗に注いでから戸を開ける。

——よお、今日は起きていたらしいな。

呵呵と笑って彼は言った。

——そう毎日寝過ぎしてたまるか。

と顔を顰めて私は言った。

——ところで今は暇か？ 話したいことがある。

気にした風でもなく彼は言った

——今日は一日暇だ、上がって行け。

いつものことなので私も気にせず答えた。

私が答えを言い切る前から既に上がり込む気満々であつたらしく既に靴を脱ぎ始めている。少々：いや、かなり図々しいものの、しかし憎めない男である。

我が家に入り上がりこむやいなや座敷の上の彼が来るたびに座っているため、最早彼用となつている座布団にどかりと座り胡座をかいた。

そして小脇に抱えていた数冊の書物を机の上で開いた。

——お前のご執心の桃の精な、あれから少し調べてみた。

——執心などしていない。

咄嗟に言い返す、決して執心しているわけではない。

少々気にかかるというような、その程度だ。

——そう照れるな、まずはこれを見ろ。

反論したかったが、これ以上は水掛け論になるだけだろうと判断し、彼の指し示す開かれた書物の頁を覗きこむ。

——桃娘、件の娘は恐らくそれだろう。

桃娘、耳慣れない言葉だった。

その頁にはその、桃娘についての詳しい記述がされていた。曰く、桃娘とは乳離れをしてからは桃だけを与えられて育った娘、とのことで、その体からは甘い芳香が漂い、汗や涙など分泌されるものの尽くが甘美で、特に尿は不老長寿の妙薬として扱われるらしい。

しかし桃だけという食習慣が体に良い訳もなく、寿命は非常に短いということ、そもそも寿命を迎える前に育ての親でもある好事家によって夜の相手をさせられ、その激しさに耐え切れず命を落とすことの方が多い、と。

——次に、これを見る。

差し出されたもう一冊の書物を見る。

その頁の見出しに在ったのは白化症、という文字だった。白化症というのは、生まれつき髪や肌は非常に白く、目は血のように赤く、そしてその体は日の光に弱い、そういう体質で産まれる者を指すのだそうだ。

——これは、飽くまでも俺の予想だが。

一つ前置きをして、彼は自分の予想を語りだす。

——あの娘は恐らくどこからか桃娘にするためにと買われてきたのだろう、白い髪に赤い目を気味悪がった産みの親から売られてな。

確かに、と私は頷いた。

それならば子の無いはずの家に子が居ることも、娘の傍でする強い桃の香りも、昼間はあの娘が出歩けないことも全て納得がいく。

——まあ、それだけだ。

書物を閉じると彼は頬杖をついた。

——聞いた見た目と、年齢が一致しているのならその娘はそう永くない。知ったところでどうにも出来んが、知らんよりはましだろう。

——ああ、わざわざ済まないな。

軽く頭を下げて礼を言う。そうだ、知ったところでどうにも出来ない、する気もない。私はあの娘にとっては何者でも無いのだから。

——それにしても、何故そんな娘に傾倒する、俺にしておけばいいものを。

——寝言は寝て言え。

ふざけた言葉を切り捨て、私も頬杖をついた。

——……馬鹿なことは考えるなよ。

念を押すように、真面目な顔に戻った旧友は言った。

——わかっているさ、するわけがないだろう。

鼻で笑って、私は流した。

馬鹿なこと、そう例えば：あの娘を桃園から盗み出す、なんてことは。

そのまましばらく話し込み、腹が減ったと言って彼が帰っていった頃には、注いでおいた茶は冷め切って不味くなってしまっていた。

三夜

その夜も、私は塀の前に立っていた。来る理由などは、最早無いはずではあるのだが。

どうしても昨夜の踊りと娘の笑顔とが頭にちらついて、眠ろうにも眠れずここまで来てしまったのだ。

今夜は風が強い。土埃や多少の塵が風に乗って飛んでくる。見上げれば薄い雲が流れていく、今宵は満月だ。

慣れた動作で塀を乗り越え、飛び降りる。また一陣の風が吹いて、白い花卉が周囲を舞い吹雪いた。

花吹雪の中、目を細めながら進んでいくと、気がつけば目の前にあの娘が立っていた。

娘は笑顔を浮かべながら私の手を両手で握りしめ、私はその手を軽く握り返す。見れば見るほど、触れれば触れるほど、儚く消えてしまいそうな娘だった。

今夜は特に急いでいるというわけではないようだ。ゆったりとした足取りで奥へと進んでいく。

手を引かれ、娘の後ろ姿を見つめながらぼんやり歩いていると、ふと、この娘の名前はなんだろうか、等という考えが浮かぶ。

いつまでも娘、娘と呼ぶのも具合が悪い。しかし本人に聞こうとも答えが返ってくるわけもないだろう。

ならば勝手に自分なりの呼び名を付けてしまおうしかないだろう、という結論に至る。さて、なんと呼ぶべきか。

そう思っているうちに、昨夜娘が舞っていた広場まで辿り着く。着いた時に繋いだ手は離されて、今は私の少し前を歩いている。

広場の中央近くでこちらに振り向いた時、ひらりと服の裾が翻る。それを見た時に、一つ名前のようなものが思い浮かんだ。

——小桃。

一言だけ私の口から零れ落ちる。

桃園の小さな娘、安直だとは思いますが、それなりにしっくりくる呼び名だと思う。

自分のことを指しているとは思わなかったのだろう。娘…小桃は私を見て首を傾げている。

伝わりと期待はしていないが、歩み寄って行って小桃自身を指してもう一度、

——小桃。

そう言った。

次に自分のことを指して、自分の名を告げた。意味のない行為だ、どうせもう永くはない娘相手に名前をつけて、名前を告げて。

それ以上は繰り返さずに、私は目を伏せ小さく首を振った。

何故か疲労感を覚え、昨夜のように切り株に座ろうと踵を返せば、後ろから着いて来る小さな足音が聞こえた。

こちらが先導されることはあったものの、あちらが着いて来るといふのは新鮮に感じた。

――攫われても知らんぞ。

皮肉気味にそう呟きながら振り返ったその時、一際強く風が吹いた。

あまりの勢いに一瞬息を詰まらせるが、それもすぐに収まった。閉じていた目を開くと、少し離れたところで尻餅をついている小桃の姿が見えた。

両手で目を擦っておりなかなか立ち上がらない、飛んできたものが目に入ってしまったのだろうか。小走りに駆け寄ってその手を退けると、目は赤くなり涙で潤んでいた。

――擦るんじゃない、傷がついてしまうだろう。

そう言っただけに手を添えて目をよく見てやるが、特に大きな塵のようなものは見当たらない。

――土埃が目に入ったのだろうか、瞬きをするんだ。

と言っても伝わらないのだろうし、自分の目を指さして瞬きを繰り返した。すると小桃もその真似をして瞬きを始め、やがてその白く透けた睫毛の下から涙が数筋流れ落ちる。

それを袖で拭ってやっているとやがて小桃の表情は笑顔に戻った。目の痛みが無くなったのだろう。声を出さないまま嬉しそうに笑っている。

小さくため息を吐き、脇の下に手を入れて立ち上がらせてやった。子供の頃遊んだ人形を大人になってから持ち上げて、その小ささを知った時のような軽さだった。

服の尻の辺りや、地面に突いたであろう手の平をはたいてやっていると、そのうちいつもの鐘が鳴った。

今日もすぐに駆け出して行くのだろうかと思っただけ、今日は違った。はたきやすいようにと軽く掴んでいた手に触れてきたのだ。

――どうした、行かないのか。

そう言いつつも私からは手を離さなかったのは何故だろうか。

小さな手が私の指を握りしめる。あまりにもか弱く、頼りない。

――また明日も、ここに来る。

だから、今は帰るんだ。通じないとはわかっていたのに、そう言わずにはいられなかった。

軽く頭を撫で、指を掴んでいる手をそっと外す。鐘の方向に体を向けさせ、促すように背中を押した。

そうすれば少し俯きながらも歩を進め、時折こちらを振り返りながらも、その姿は桃園の奥へと消えていった。

夜空を見上げれば、月は既に傾き始め、来た時よりも雲が濃くなり始めていた。ほつれた髪を整えようと手を動かすと、袖口からふわりと桃が香った。小桃の涙を、拭った箇所だった。

舐めてみれば微かに甘い。彼の予測は、当たっていたようだ。

湿り気を帯び始めた空気と頭上の黒雲に、何か黒く重い嫌なものを感じた。

翌朝は雨音で目が覚めた。窓から外を見てみれば酷い大雨だ。

こんな日は家に居るに限る。茶の支度をしながら軽い身支度をした。昨日とは違って熱く美味しい茶を啜りながら、読みかけだった本を開く。

するとその頁の隙間から、白く薄いものが舞い落ちた。二日前、私が挟んだ桃の花弁だ。

すっかり瑞々しさは失せていたが、本に挟まれていたせいか皺も寄らずにピン、と平らになっていた。

私はそれを指先で軽く撫で、柔らかな紙に包んでから読み終わった頁に挟み直した。

そうしてふと窓の外を見てみれば、表の雨足はより一層強さを増していた。

四夜

午睡から目を覚ましてみると、日はとうに落ちて、窓の外の空には星が見えていた。

外に出ると、頭上には昼の大雨が嘘だったかのような満天の星空が広がっていた。約束通り、今夜も桃園へと行くことが出来そうだ。

桃園の地面は雨でぬかるみ、風に散らされながらもまだ咲いていた桃の花々も殆どその花弁を落としてしまっていた。

その光景を見て些かの嫌悪感と、僅かな不安感のようなものを感じ、私は泥が跳ねることも構わず、足早に奥へと進んでいった。

少し進めば、木に寄りかかった白い影が見える。小桃だ、歩きまわっていないとは珍しい。

私の濡れた足音を聞きつけたのか、小桃は伏せていた顔を上げた。…瞬間、その表情に息が詰まった。その表情は、いつもの瑞々しい花のようなものではなく、触れれば散る、乾ききった花のように見えた。

気のせいだったのだろうか、一瞬間の後にはいつもと変わらない笑顔でこちらへと駆け寄ってくる。

その足がもつれ、その体が傾き、その、力の入っていない腕が、宙を掻く。私は咄嗟に駆け出して、どうにか泥の中へと倒れこむ前に受け止めることが出来た。仰向けに抱き起こしてみれば、小桃はぐったりと目を閉じている。

——おい、しっかりしろ…！

泥の中に膝をついたまま、小さな体を揺さぶった。しばらくそうして声をかけていると、小桃はうつすらと目を開く。

それを見て、私は安堵のため息を零した。同時に、小桃の命がもう永くないことを思い出す。

まだ冷え込む春の夜に散歩することだって、病身には障るだろう。今夜はもう帰したほうが良いと判断し、屋敷の近くまで連れて行こうと立ち上がる。

小桃は最初ぼんやりと抱えられていたが、私が広場を通りぬけ、更に奥に進もうとした時、ようやく反応を見せた。

服の胸元に違和感を感じ、見下ろすと小桃が小さな手で私の服を握りしめ、目が合うと嫌々をするように首を振った。

——帰りたく、ないのか。

首を振るのを止め、私の目をじっと見つめる。

美しい赤色に、私の顔が影となって映っていた。月並な、洒落た言い回しで言うならば、まるで吸い込まれるような瞳だった。

私は踵を返し、広場へと戻る。そして少し湿った切り株へと腰掛け、腿の上に

小桃を座らせる。

——鐘が鳴るまで、だ。

そう呟いて、軽く小桃の頭を自分の胸元へ寄りかからせる。

真円に近いものの、ほんの少し欠け始めた月が広場を見下ろしていた。初めて感じた時よりも低い体温の小桃を、温めるように両腕で包んだ。

あまりに大人しいので眠ってしまったかと思いつき折見下ろせば、丸い瞳をこちらに向けて、ただじっとしているのだった。

ようやく人らしいと感じるところまで温まったところで、いつものように鐘は鳴った。

小桃は特に暴れもしなかったが、そっと地面に下ろしてやれば、いつもの、ひとりで散歩をしている時のような足取りで歩き出した。

木の中へ入っていくその前に、少しだけこちらを振り返る。私がどうすべきか迷っている間に、今夜初めて見たのと同じような表情を浮かべて、小桃は桃園の奥へと消えていった。

後には服のあちこちを泥で汚した、みすぼらしく、汚らしい姿の私だけが残った。

明くる日の目覚めは酷いものだった。夢の中で何度も小桃が惨い目に遭わされ死んでいく姿を見た。

床から起き上がった瞬間、凄まじい吐き気に襲われ腹の中に何も無くなるまで、厠で嘔吐した。

口の中を何度も濯ぎ、酷い匂いと味を洗い流す。冷水で顔を洗って、残酷な情景達を振り払った。奴に見せられた書物のせいだ、と、この場に居ない旧友を恨んだ。

しかし、陰鬱な気持ちはどうしても消えていかない。私が見たのは夢であるとはいえ、似たような末路を辿ることはほぼ間違いないだろう。

そのために作られた、哀れな玩具。どうなるうが、どうでもよかつたはずだった。

しかし、今は。

五夜

今夜、私はいつもと違った決意を持ってここまで来た。彼女が私を受け入れてくれたのなら、いや、拒んだとしても、彼女を連れて、そのまま……。

その決意は、小桃に会った瞬間、どこかへ霧散してしまった。無邪気な、いつもの花のような笑顔で、手を引いて歩き出されてしまったのは、それを邪魔することなど出来なかったのだ。

その夜小桃は広場に向かうでもなく、また、別の場所を目指すでもなく、私を連れて桃園の中を歩きまわった。

小桃は昨夜見せたような雰囲気を見せず、ただ夜露に濡れた葉を眺めたり、もうほんの僅かしか残っていない花を見上げながら歩いていた。

夜露が月光を反射し、きらきらと光っている。その中を歩く小桃の姿はいつもよりも美しく、幻想的に見えた。

しばらく歩いて、最終的にはいつものように広場へと辿り着く。小桃は私を切り株に座らせ、自身はその前に立っていた。

小桃越しにほんの少し欠けた月と、満天の星空が見える。その星々の輝きに背中をおされるようにして、大きく息を吸い込んでから、私は今夜の本題を切り出した。

——なあ、小桃、私と一緒に……。

しかし、その言葉は言い終わる前に遮られ、ついに最後まで伝えることは出来なかった。

総身が、熟れた桃を齧った時のような甘く芳しい香りに包まれる。

口内にも微かに桃の味が広がって、私はくらりと酔ったような心地になり、その感覚は初めてこの桃園を訪れた時のことを思い出させた。

私の言葉を遮ったのは、小桃の唇だった。私のそれに、自分のものを重ねて。

一瞬だったのかも知れないし、それとも非常に長い時間だったのかも知れない。柔らかなそれが離れていった後も、私は石になったかのように動くことが出来なかった。

その顔は、今でも鮮明に思い出せる。恥じらいに頬を染め、嬉しそうに笑った小桃は、今まで見たどんなものよりも美しく、そして、哀しかった。

鐘が鳴り響き、私は我を取り戻した。行ってしまおう、行っては駄目だ、そう頭で考えた瞬間には、小桃はもう、手の届かない場所まで離れて行ってしまっていた。振り返ることもなく、真っ直ぐに、木々の合間へと。

届くはずもないのにいつの間にか伸ばしていた私の手が、頬を伝う生温かい感触が、そこに落ちる柔らかな月の光が、ただただ虚しかった。

……その後、私が小桃に会うことは一度も無かった。明くる日の夜も、またその次の夜も、小桃が桃園に姿を現すことは無かった。

あの夜、彼女を追いかけていれば、あの夜、無理矢理にでも彼女を攫っていれば、そんな後悔が何度も頭を巡った。

だが、頭の隅にいる冷静な私はいつだって、これでよかったのだ、と呟くのだ。それを聞いた瞬間、後悔達は鳴りを潜めて彼女の最後の表情だけが蘇ってくる。

——これでよかったのだ。

頭の中の言葉を口に出して繰り返せば、胸の内のざわめきも静まっていく。

毎日のようにそれを繰り返した時期も、もう随分昔のことだ。

それでも、桃の花が咲く時期には必ず思い出す。

花のように優しく、儂かった

私の恋した、少女のことを。

二人で過ごした、桃の夜を。

■

そこまで書き上げたところで私はやっと筆を置いて溜息を吐いた。誰かに彼女の話をする時の助けに、と書き始めたこの物語もついに書き終わり、私の中でも少し整理がついた気がする。

そんな時、居間に通じる襖が開き、一人の男が部屋に入ってきた。彼は呵々と笑い、私に湯気の立つ湯呑みを差し出した。

「進み具合はどうだ、もう終わった頃か」

「お陰様で、今終わったところ」

思えば彼とも何年の付き合いになるだろう。

あの頃とは随分と関係性も変わったものだが。

「おお、どれ、見せてくれ」

「ええ、これよ」

紙の束を差し出し、私は彼の淹れてくれた茶を啜った。

彼はかつての旧友であり、今では私の夫だ。

「なんだ、旧友ではなく、夫と書いてもいいだろう」

「この頃は旧友だったのだから、それで正しいの」

……本当に、これで良かったのだろうか、彼には悪いが、どうしてもそう思ってしまう。

結婚を急かしていた母のことも、好意を持ちながらも友として接してくれていた彼のことも、全てを投げ出して小桃と逃げていたなら……。

そんな益体もないことを考えながら、窓の向こうの少しだけ欠けた月を見上げた。

(終)